



ヒル山砦跡(第二次)発掘調査報告書

1984

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

ヒル山砦跡(第二次)発掘調査報告書

1984

鳥取市教育委員会
鳥取市遺跡調査団

序 文

現在、鳥取市内には、戦国時代に築かれた山城や砦の跡が数多く残っております。それらは、守るに固く攻めるに有利な場所、すなわち交通の要所にそびえる見はらしの良い山の頂に築かれており、遠くその孤高な姿を望むとき、また山頂に登り頂上の郭より下界をながむるとき、大いなる時の流れの中で必死に己の身をつらぬき通さんとした武将の生きざまが思いしのばれ、私達に無言の教訓を与えてくれるようと思われます。

今回発掘調査を行ったヒル山砦跡は、羽柴秀吉の鳥取城攻めの際、秀吉側の手によって構築された砦の跡であり、鳥取城を左手に、丸山城を前方に、右手には斐川・千代川及び日本海を望む、まさに鳥取城攻防戦の前哨基地としての主要な位置を占めております。

発掘調査は、このヒル山砦跡の一部分が水道局の配水池建設用地として消失を余儀なくされるため、これを記録にとどめ、築城研究の貴重な資料として残す必要上実施したものであります。

この調査にあたり格別のご協力をいただいた鳥取県立博物館の方々に対し厚くお礼を申し上げるとともに市水道局の文化財に対する深いご理解に対しまして感謝を申し上げます。

昭和59年3月31日

鳥取市教育委員会

教育長 田村一三

目 次

I 調査の経過	1
II 位置と環境	1
III 調査の概要	5
IV 補 記	18

挿 図

第1図 周辺の城・砦跡	2
第2図 ヒル山砦位置図	7
第3図 地形実測図及び縦断図実測図	9
第4図 ピット状遺構、配石状遺構配置図	12
第5図 ピット状遺構、平面断面実測図	13
第6図 トレンチ断面実測図	15
第7図 ヒル山砦遺構要図	17
第8図 羽柴秀吉方砦の遺構分布図	25

例 言

- 1 この報告書は、鳥取市浜坂地内において、鳥取市水道局による配水池新築事業に伴い事前に発掘調査したヒル山砦跡の報告書である。
- 2 本調査は、鳥取市遺跡調査団によって、昭和58年10月11日から昭和58年12月23日にかけて実施したものである。
- 3 本書はI・Ⅳを橋原伸一、Ⅲを塗原利明が分担執筆し、挿図・トレースは福出範史が行った。なお、Ⅱは、ヒル山砦跡調査報告書（第一次・1980鳥取市教育委員会）のものを再掲した。

I 調査の経過

ヒル山砦跡は、その一部が民間業者による宅地造成工事のため消失している。この経過及び事前発掘調査については、昭和55年度のヒル山砦跡発掘調査報告書（市教育委員会作成）に記載のとおりである。今回（昭和58年3月25日）、鳥取市水道局より、前回の調査地の上部に配水池を新築したいので文化財包蔵地について調査してもらいたい旨依頼があった。市教育委員会は、現地踏査の結果、中世期の砦跡を確認し、文化財保護法による手続きをとるよう市水道局に対して回答をした。

同年9月5日、市水道局は市教委・県教委を経由し、文化庁に対し埋蔵文化財発掘通知を提出した。9月17日、県教委は市水道局に発掘調査の実施について通知、市水道局は鳥取市遺跡調査団に発掘調査を依頼した。9月26日、市遺跡調査団は市教委・県教委を経由し、文化庁にて埋蔵文化財発掘調査届を提出した。9月27日、市水道局と市遺跡調査団の間で発掘調査委託契約を締結した。

10月5日、市遺跡調査団発掘担当者は市水道局関係者と発掘調査区域の確認をし、10月11日より発掘調査作業を開始した。調査区域内の大木の伐採、草木の下刈りの後、地形測量を行い、必要ヵ所にトレチを入れながら造構の調査を行った。地形の状況から古墳の可能性も予想されたが、調査の結果、古墳は存在しなかった。12月23日、測量、写真撮影等現場における必要な作業をすべて終了した。

II 位 置 と 環 境

1 位 置

今回調査を行ったヒル山（昼食山）は、鳥取市浜坂字ヒル山及びウツロ谷に所在する。鳥取市街地の北方にあり、鳥取駅より約4kmを計る。鳥取平野の東端、北部に位置し、北は鳥取砂丘、日本海をひかえ、東の山系、開地谷より尾根続々にコブ状につき出た小稜である。西は丸山をかすめ、鳥取平野が広がっている。鳥取平野を形成した千代川はかって、丸山の西の山下より浜坂部落に達し島出として日本海に注いでおり、水路交通の要をなしていた。南は円護寺川によって形成された狭少な平野をはさんで、太閤ヶ平、久松山、さらに北へ伸びる雁金山の尾根を望む。現在、ヒル山は砂丘へ抜ける国道9号線によって開地谷と分断されており、すぐ南は摩尼寺への道との分岐点となる。民談記等の古書によると、東南の彎曲した山裾をウツロと称し、浜坂へ向う道に大岩があり、この上の山を昼食山と号したと記されている。



- 1 鳥取城跡 2 丸山城跡 3 本陣山砦跡
 4 ヒル山砦跡 5 道場山砦跡 6 秋里砦跡

第1図 周辺の城・砦跡

2 歴史的背景

天正元年(1573)因幡の守護山名豊国は、その居城を布勢の天神山(鳥取市布勢)より久松山に移し、新しい城づくり・町づくりをはじめたが、東漸する毛利氏の勢力は次第に因幡に浸透していく。た。

永禄12年(1569)の尼子勝久らの出雲乱人支援の間諜の圧力は、豊國とその家老たちに人質を鹿野

城に差し出させ、毛利の部将三吉三郎左衛門の脅する所となった。天正4年（1576）5月尼利義昭を援助することに決した毛利氏は、同年7月大阪の本願寺光佐を援助して、食糧・弾薬を送ることになった。7月13、14日木津川口に於て、毛利・鐵田の両軍は激突し、毛利氏は海戦に勝ち、武器・食糧の大坂搬入に成功したので、8月25日毛利輝元を中心に対信長大同盟が成立した。

信長は天正5年10月23日羽柴秀吉に京都をたたせ、姫路城を修築、中国攻めの拠点とした。秀吉は天正8年正月別所長治の三木城を陥し、5月出石城の山名氏政を敗走させ、直ちに鳥取城の攻撃に移った。

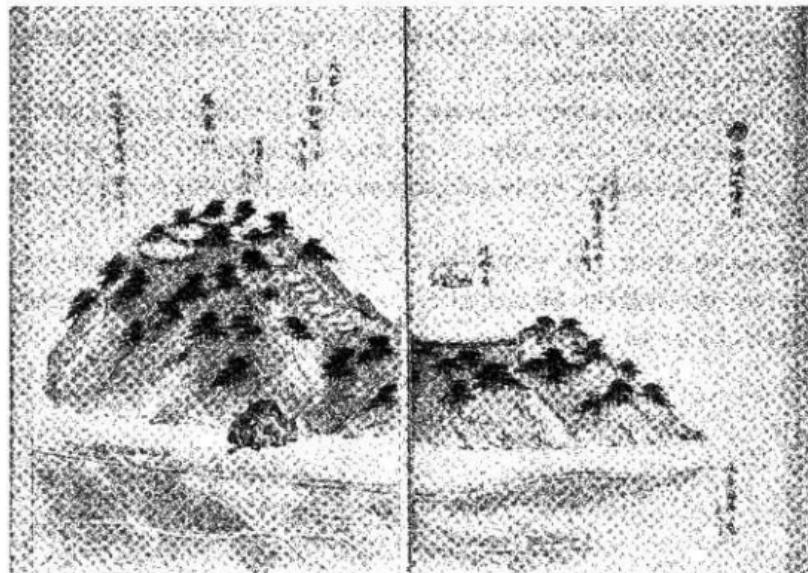
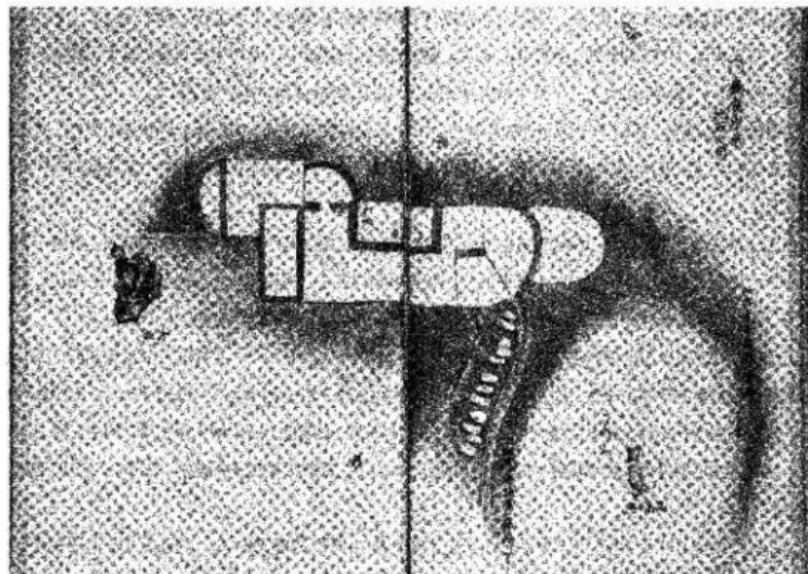
秀吉は若狭城を陥し、丹波漸城をほふり、鹿野城の三吉三郎左衛門等を追い、鳥取城の人質を手中に収め、山名豊国に降伏を迫った。鳥取城では種々論議のすえ、秀吉の申し入れを受けることにしたので、亀井鉄矩らを城番に任せ、人質を留めて鹿野城を守らせ、秀吉は軍を姫路にひきあげた。しかし、秀吉はこのままで囚縛が秀吉の旗下に加するとは考えていなかった。若狭より商船を賀露に廻し鳥取周辺の米類を数倍の高値で買占めさせ、一部を鹿野城に入れ、他は上方へ回漕させた。鳥取城では、豊国の態度を不満とする空気が次第に強くなつたので、豊国はついに城を出て秀吉のもとに走つた。城内では毛利氏の一族を城将に迎えたいと願つたので、福光の城主吉川経家が城将として派遣された。

秀吉はこの事あるを予期していたので、天正9年6月25日姫路城をたち、鳥取城攻めに軍を進めた。7月12日秀吉は完全に包囲し、本陣を帝釈山に置き、軍を三隊に分けた。円鏡守村の山頂より浜坂道場山に陣をしく右翼軍、本陣より芳心寺に至る山背上に陣をしく左翼軍、袋川沿いに城を囲む平地軍によって鉄の輪形陣を形成した。

ヒル山の砦は右翼軍の垣屋櫓岐守及び高野駿河守らの陣する砦で、鳥取城の丸山城を指呼の間に正対する要地である。丸山城は鳥取城にとっては海路より毛利氏の救援を受けるための要衝である。従つて、ヒル山の垣屋櫓岐守、その背後高地の高野駿河守、道場山の青木勘兵衛は丸山城を扼する重要な任務を持っていた。

毛利氏の救援は遂に来たらず、鳥取城の食糧全く欠乏、人肉を喰うに及んで、城主吉川経家は10月25日夜腹、部下の助命を願い鳥取城は落城した。これによつて秀吉は全力をもつて山陽道の毛利氏と対決することができた。

ヒル山跡古絵図（「旧豊さく覽」より掲載）



III 調査の概要

1 調査された遺構

(1) 調査の概略

ヒル山砦跡が位置するヒル山(昼食山)は、覚寺と浜坂の中間に位置し、国道9号線を境にして鳥取ゴルフ場と尾根づたいに続いたコブ状の丘陵である。標高57.2mの最上郭は、前回調査された尾鼻状に突き出た砦のほぼ北部にあり、築城当時の状況をとどめる郭、土塁が残されている。最上郭はまわりの土塁が郭に沿い、さらにそれらを囲むように郭が配されている。そして、最上郭を囲んでいる一段下がった郭を中心に、南へのびる尾根に沿いながら土塁が構築され、それに接して梯子段状に郭が連なっていく。土塁は、錐形になっている平坦な郭付近で終るが、最南端の砦からのびる土塁と互いに接続している。

今回の調査は、山頂部付近の高野駿河守の陣跡と伝えられる区域で、水道タンクが建設される箇所である。最上郭より一段下った最東端の2つの郭、南北に走る土塁、梯子段状の6つの郭を調査した。そして、遺構の構築状況を把握するためにトレンチによる部分発掘を行った。トレンチは第2郭を東西に横断するもの、第2郭より下の6郭を縦断するものと、土塁を南北に3ヶ所縦断するもの、東西に2ヶ所を横断するものを設定した。つぎにそれぞれの遺構について説明したい。

◎第1郭

第1郭は長軸12m、短軸10mを測る。調査区域内では最高所の郭で、標高55.2mの位置にある。郭の外形はほぼ方形を示すが、東側と南側に向ってやや突き出すように配してある。東側斜面は土砂の流出のためかなだらかに傾斜し、南側は落差のある斜面で、第2郭に付随する平坦な小郭に下っていく。

土層は、5cm前後の黒褐色腐植土を剥ぐと、軟質の礫を含む30~40cmの赤褐色粘質土層がみられた。第1郭は半分以上調査区域外にかかるので全体像がつかめ得なかったが、土層観察や地表面観察によっては、郭内における建造物等の遺構、遺物は検出されなかった。



南よりみたヒル山砦



ヒル山砦より久松山を望む

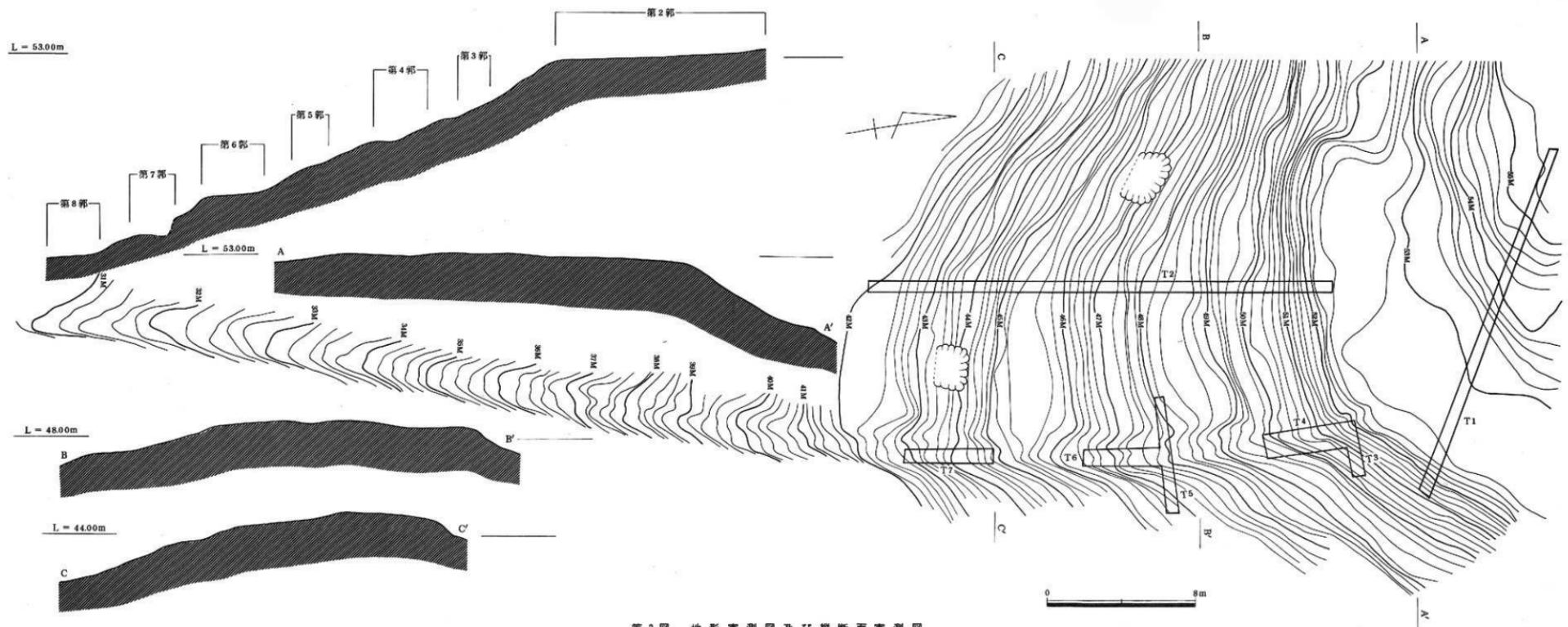


発掘前の調査地（南より第3郭～第8郭をのぞむ）



発掘後の調査地（南より第3郭～第8郭をのぞむ）





第3図 地形実測図及び縦断面実測図



西よりみた第2郭



東よりみた第2郭

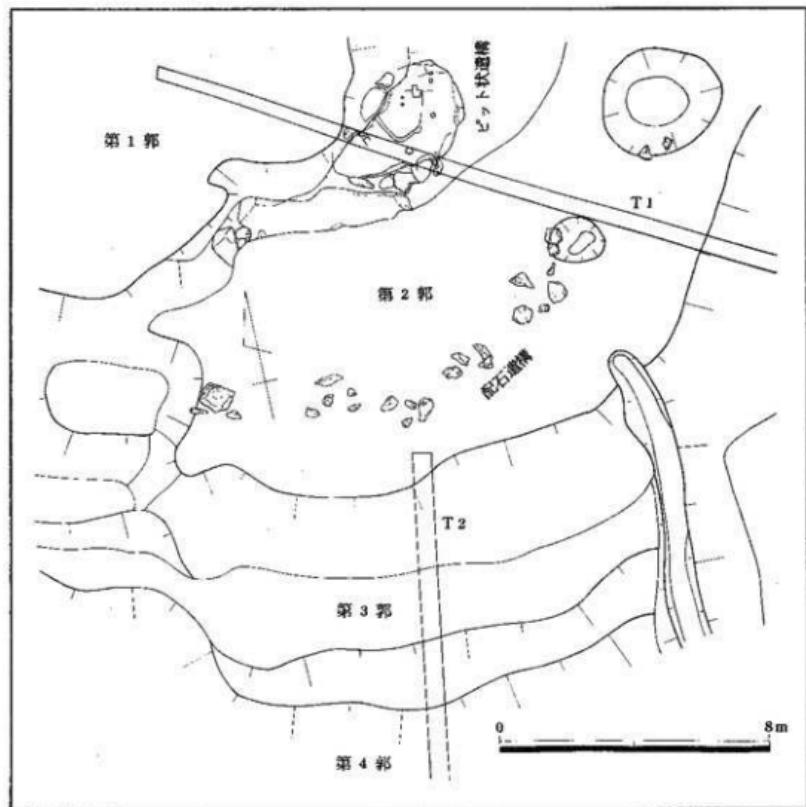
◎第2郭

第1郭の東側斜面より下った郭であり、F字型の土壘にはさまれた第1郭と北東の小上塁に隣接する平坦地である。規模は、南北に約8m、東西に約14mを測る。第2郭は、第1郭築成当時の余剰土をつき固めて築成したものと考えられる。1号トレンチ掘り下げでは、第1郭を掘削した時の余った土を地山につんでいる盛土層がみられた。盛土層は厚さ30~40cmで、郭肩部においては表土層を上に乗せているような状態であらわれた。2号トレンチでも、同様な上層が郭肩部で存在するが、次の段の郭になってなくなる。北東斜面でピット状の柱穴を含む軟質岩盤が検出され、第2郭と接している。さらに、平坦面西部から北東部にかけて、人頭大の礫が郭中央部に露出しており、南東部の郭の肩部には土壘の礫部が、郭中央部に向って突き出している。他に郭内における遺構はなかったが、郭の北東部の調査区域外の郭と接するところから、磁器の破片を数点採取した。しかし、遺構との関連はないものと考えられる。

第2郭は他の郭との関連から、高野駿河守が所持する山頂部の郭と垣根駿河守の出城を結ぶ中継点的役割を担う郭ともいえよう。

◎ピット状遺構

第2郭北部の第1郭より緩く下がる斜面に、1号トレンチを掘り下げる際、赤褐色粘質土層の基盤となる地山（凝灰岩）から検出された。南北2.6m、東西3.7mの軟質岩盤に鋭利な工具等を使ってあげたものとみられる。この岩盤の中央には幅7~10cm、深さ5~7cmの溝が北東から東方向へL字状にのびている。ピットはこのL字状の溝を中心にして、溝外の南部に1ヶ所（P1）、東部に1ヶ所（P2）、北西部に4ヶ所（P3、P4）ある。（第5図）さらに岩盤西部の1号トレンチ内からも1ヶ所検出した。（第4図）P1、P2は、径12~20cm、深さ15cm前後を測る。岩盤を方形に切ったものは、一辺15~20cm、深さ5~15cmを測る。ピットの間隔は、P1~P2間約1.7m、P2~P3.4間約1mを測る。ピットの位置関係は第5図に示すとおりであるが、建物の存在を示唆するような規則性は認められない。他に、無数の小ピットが不規則に存在するが、意図的に掘られたものではないと考えられる。遺物は全く検出されなかった。



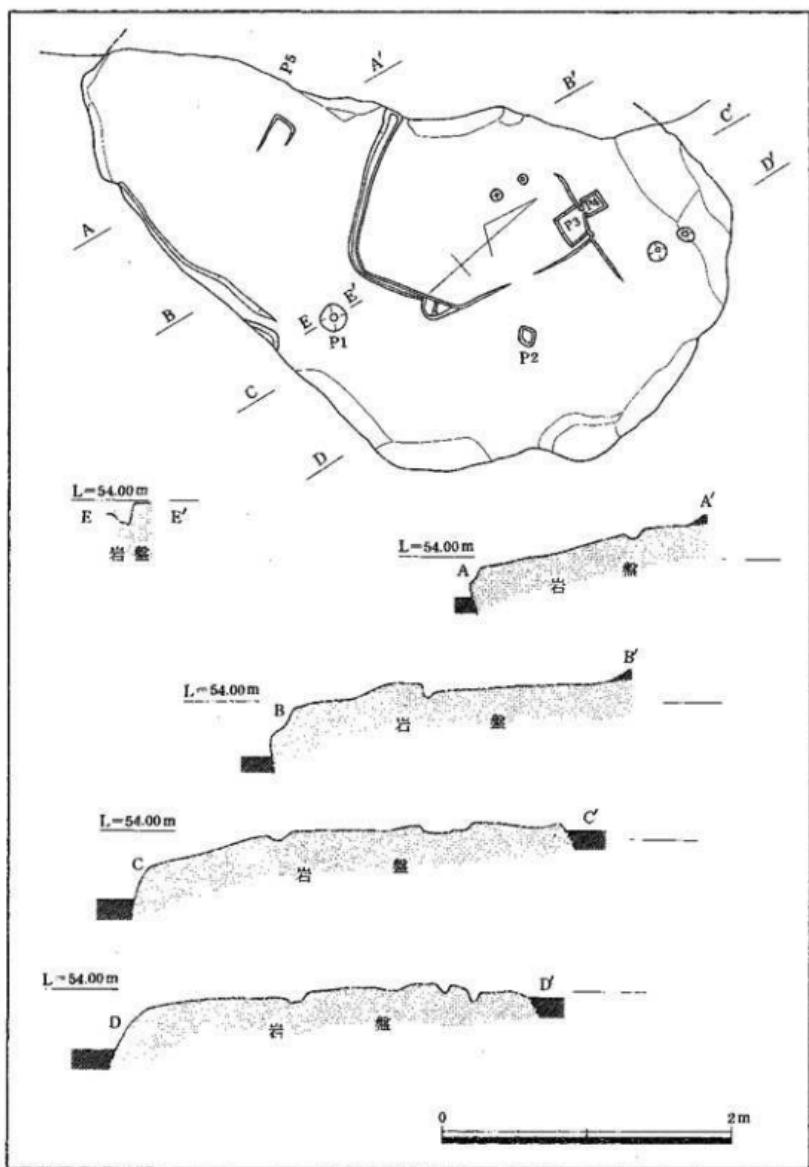
第4図 ピット状遺構、配石状遺構配置図

◎配石状遺構について

第2郭の中央部に、人道大前後の礫を使用し、北東部の自然にできたくぼみから、第1郭を中心半円状に廻り、第2郭と隣接する小郭付近まで達する。トレンチ内における石組は無秩序であった。肩部において、多量の盛土を支える土留めの機能を果たす石垣の存在ではなく、第1郭を削平した時点の軟質岩を利用し、第2郭を堅固に構築するために用いられた礫ではなかろうか。

◎土 壁

土壁は第2郭の南東肩部に、端部が突き出しており、第3郭で断面がカマボコ型となるような形を保ちながら、南へ尾根に沿ってのびる。第5郭から第6郭にかけて南西に折れ、梯子段状の郭を下りていき、山下から登ってくる出城の土壁と互いに接する。土壁の全長は75mあり、本城跡で最



第5図 ピット状造構、平面・断面実測図

も長い。土壘の規模は第3郭に接する場所で、上縁巾0.8m、基底巾2.2mを測り、第8郭に接する場所では上縁巾1m、基底巾2.1mを測る。第3郭～第8郭の郭面からの比高差は共に約0.3mで、ほぼ同じような高さで尾根を下っていく。土壘の構成は、第3郭～第8郭を構築する際、各郭で地表を削平し、削られた土を尾根に盛り上げ、上壘を立てて構築している。各トレンチによって土壘断面の地層を観察すると、軟質岩盤の堆山を基部にして、暗茶褐色粘質土層（旧地表層）を最下層に含み、赤褐色粘質土層あるいは褐色粘質土層が盛土として存在する。5号トレンチにおいては郭部の削土及び礫を地表面に盛上した様子がはっきりとうかがえる。盛土は各トレンチによっては様々な土層を持つが、基本的な層序関係は変わらない。ヒル山の土壘は、土留めの機能を持つというよりも連絡用としての通路の性格が強い。頂上における建造物等の遺構は不明であり、遺物も検出されなかった。

◎他の郭について

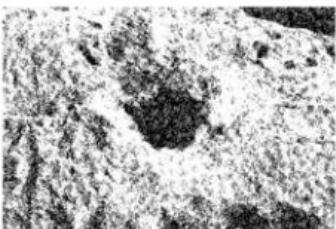
第3郭～第8郭は、南西方向に伸びる土壘を共有する梯子段状の郭である。規模は最大のもので、全長約20mを測り、平均して全長8～10m、幅3～5mである。各郭の西端は、最上郭方向に向いている。各段の比高差は1～1.2mを測る緩やかな斜面である。表土削平後のトレンチ掘削の結果、第2郭の土層と同様に地表面を基盤とした暗茶褐色粘質土層、赤褐色粘質土層、褐色粘質土層が検出された。上段の郭を削平した時の堆土をそのまま下段の郭に利用し、肩部に盛土している。郭内における遺構、遺物は検出されなかった。

調査区域外の郭については、南へ下りていくにしたがって比高差がほとんどなくなってくる。郭の大きさは、

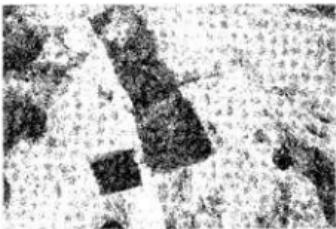
調査区域内の3郭～8郭より大きくなるものもある。ちなみに各郭のおおよその面積をみるとつきのとおりである。第1郭約25.3m²、第2郭約62.5m²、第3郭約14.4m²、第4郭約13.5m²、第5郭約4.9m²、第6郭約9.8m²、第7郭約5.5m²、第8郭約18.5m²。郭の性格は、山城の典型的性格を示す自然の地形を活用して盛土しているものとみられる。当時の土木技法の水準の一端をみることができる。



ピット状遺構(東より)



ピット状遺構近接写真②

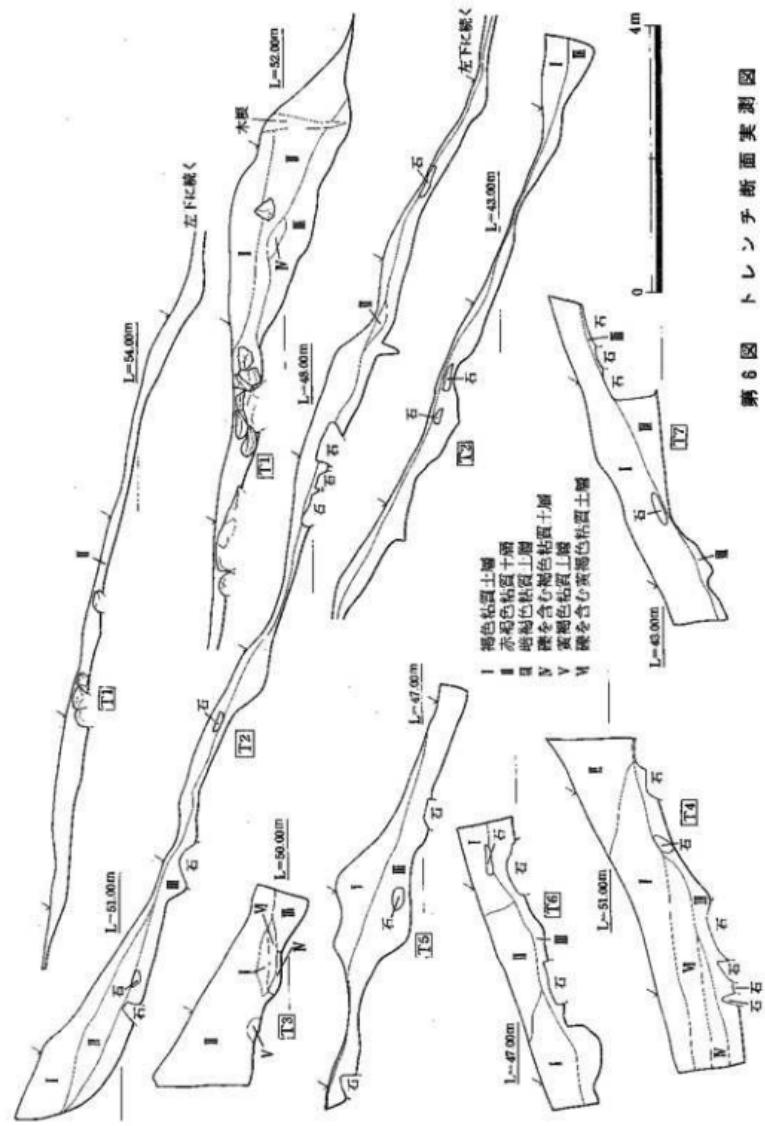


ピット状遺構近接写真③



ピット状遺構近接写真④(T-1より)

第6図 トレシチ断面実測図





土 壁（西より）



土壁断面（T-3）



土 壁（南より）

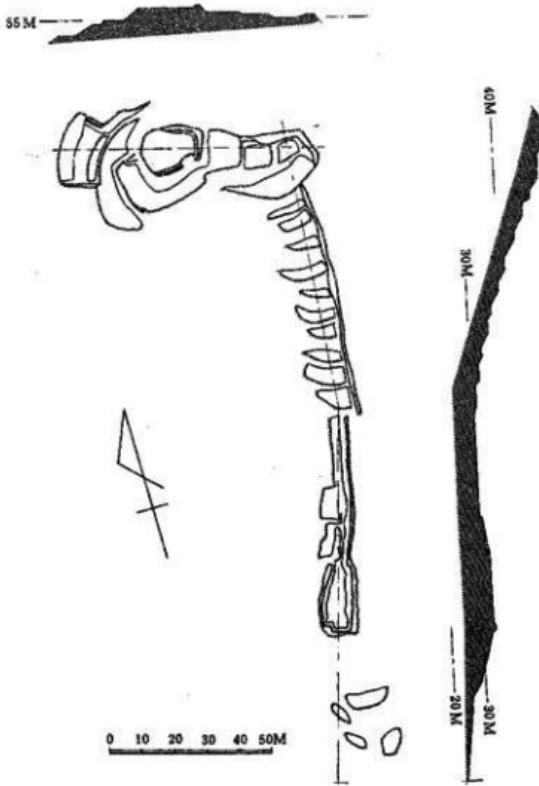


土壁断面（T-5）

(2) 山頂部の遺構について

山頂部の本丸とおもわれる郭は標高57.2mを測り、第2郭の西方約35mの場所を占める。郭はほぼ方形を示すが、東に向って突出しており、南北に約12m、東西に約15mを測る。郭を中心にしてまわりには土壘と郭が築かれており、東・南・西部に位置している。L字型の東部の土壘は基底巾2m前後で北東にコーナーを持ち、西部と南部の小土壘は全長5m前後のもので最上郭に接する。東部の土壘と南部の上堀にはさまれた虎口が南東隅に明瞭に残っている。これらの土壘と最上郭を半環状の郭がとりまく。凹字型の郭は最上郭の東側から西側にかけて配されている。東側は、南北約13m、東西約8mを測る方形のプランを示し、西側は、南西にコーナーを持つL字型のプランを示している。そして最上郭の西側には南北約15~20m、東西に約5m前後を測る南北に長い郭が梯子段状に築かれ、全長約16mの東西に細長い土壘に接している。

山頂部一帯の区域は旧塙さく覧によると大岩の上、高野駿河守の陣所として、略絵図及び地取之図に描かれている。本丸の郭は南北六間、東西八間と記されている。最上郭は、周辺を見渡すことができる高台にあり、ヒル山砦の本丸にあたるものと推定できる。ヒル山砦は土壘・郭の配置からみて、北部に全く遺構を持たない攻撃型の山城の性格がうかがわれる。



第7図 ヒル山岩造構要図

IV 補記

久松山を望む秀吉方の砦跡について

久松山の周辺の山には、羽柴秀吉が鳥取城を攻める際に築いた砦の跡が今なお残っている。これらの遺構の存在はよく知られた事実であり、ことさら書き述べることでもないが、見て感じたままを書いてみた。

(1) 秀吉方の布陣について

本陣山から円護寺へ行く道をたどり、小高い尾根にある展望所に立つ。この地点ほど、秀吉の布陣を明確に知ることのできる所はないと考える。久松山を真正面にとらえ、右手に目をやると、遠くに白い波をみせ、限りなく空と接する日本海が美しく浮かんでいるかのように見える。賀露の港もくっきりと手に取るように見え、2・3艘の帆船すら書きたい気持ちにかられる。そして、小さく丸山が見え、雁金山・久松山へとつづいている。それを見とりまくかのように、浜坂・覚寺の低い山など、そして円護寺の山々がつづく。下方に、円護寺神社裏山がきれいな円形をなしてみえる。これらの光景に当時の状況、つまり戦旗たなびくあり様を各尾根に想定する時、秀吉の布陣のスケールの大きさ、毛利の大軍をも計算に入れたであろう緊密な陣と陣との関係がうかがわれ、久松山がひとり超然と天をあおいでいるかのように見える。



本陣山より久松山及び日本海を望む

同地点から左方に目をやると、遠くに大路山が低く横たわり平和そのものといった鳥取平野を望むことができる。しかし少し手前に目をうつと、源太夫山を左後方にして馬場町の裏山が、らくだのコブのように峰を連ね、だんだん高くなり本陣山につづいている。これまた久松山の脇腹に槍をつけたような様子で一分の隙さえみせない。

また正面は、久松山に向って尾根が重なりあうようにつづいているが、左右から谷が複雑に入り込み、この地点から鳥瞰することは困難である。まさにクルミの中身のような不定形である。しかしこの一帯は久松山と直接尾根つづきであるため、何か一触即発的な緊迫感がただよう。つまり、円護寺方面と栗谷方面の交差点でもあり、両陣が相対する通路でもあるからである。これはあくまでも推論であり、私自身おぼつかないのであるが、それぞれ高い尾根に登ると、決まって久松山をまちかにみわたせる好所があり、そこには久松山の方角に對面して土塁が設けてあり、後方には何もないのである。そして、この土塁も他の陣所のものとは異っていて、はなはだ簡単であり、斥候が見張るた

めのものとでもいった様子なのである。この見方でもってこれらの遺構をみる場合、久松山とごく接して存在しているのもあり、じりじりと秀吉方が攻め寄ったというように考えられ、吉川方の焦燥のさまが伝わってくるように思われる所以である。

最後に、左手にそびえる本陣山の方角に目をやると、そこは本陣山が期になだらかな平地をみせるものの、深い谷へとおりて行く。この一帯は、本陣山を中心^{なる}にヤツデの葉のように尾根が伸びており、その先が栗谷の谷、からづみの池へと降りて行くのである。ここは歩きなれた者でも尾根を一つ間違えるととんだ方角に向いており、困ってしまう所である。本陣山の裾には非常に広い郭がいくつも段状に設けてあり、多くの兵士や物資を収容するためのものであると考えられる。また、その下方には巨大な堀が數本掘られており、なぜこの様な堀が必要かと思われ無氣味にすら感じられるのである。

この無気味さは、何か大きな戦を想定しての備えを想像させるからなのであろうか。そのついでといつては申し訳ないが、本陣山から摩尼山にむる道のクレー射撃場までの道を歩いてみると、小高い尾根の上に郭が設けてあるのがわかる。これを秀吉軍の遺構であるという確信は全くないが、これをそうだと見た場合、郭は東の方角に開けており、福部の方を睨んだものと考えられ、これは秀吉方の補給路確保のためのものか、毛利方の進攻を見張るためのものかよくわからないが、相当背後警備に心をくだったものと思われる。この戦は織田勢と毛利勢の雌雄を決する大きな意味をもった戦だったということだが、秀吉方の厳重な包囲網を見るにつけ、実際地上戦は少なかったという事とあわせて考えてみたとき、そもそも防衛とはどういうものかという事を考えさせられる。

(2) 秀吉方砦の考察について

秀吉方の砦について、それぞれの砦に共通して言える事を書き述べたい。

まず、砦の位置としては、久松山が真正面に見わたせる所にある。何の障害もなく180度以上にわたってみえるのである。つまりは突出した、あるいは独立した山の上にあるということである。そして、決まって背後あるいは左右後に太閤ヶ平をはっきりと望むことができる。これは太閤ヶ平がとても見立つ良い位置にあるから当然といえば当然のことだが、あまりの正確さに驚く。ここには郭がありそうだと目をつけて登ると、頂上に郭があり、急に視野が開ける。すると、久松山が見え、人間ヶ平が見えるのである。何か太閤ヶ平から見られている様で気味が悪い。これと反対に、地图でみてここに砦があってもおかしくないと思う所に登ってみても、太閤ヶ平が直接見えない所には砦はない。太閤ヶ平から直接監視することで軍規を統制したのだろうか。

次に、陣の配置について、谷からの進攻に備えたと思われるふしがあるのである。これは砦の位置が突出部にあるから、左右の谷を必然的に警戒したのだと思うが、なぜそこまで谷というものを意識しなければならなかったのだろうか。谷というのは陰になっており、敵の進入を受けやすいというのだろうか。谷というのは敵の侵のまじかまで入りこんでいるので、こっそり進入するのに良いのだろうか、それにしても上から石を落とされたら一たまりもないのに、と考える。実際の戦さについて知識がないので困ってしまう。戦さについての書物が欲しいところだ。

ともかく郭の配置（一ノ郭、二ノ郭の位置）、土壘の高低やそれの位置、出入口の位置など、山城

の陣については何かこれといった決った法則ではなく、地形的要因や縛り張りした者の考えによりそれぞれ違うのだろうと思う。非常に扱いにくい。ふつう私達は頂上ノ丸を中心に考えて敵と相対する正面の側に段々を築くものだと考えたい。しかし段は後方か横の方につくられている。そして頂上ノ丸は見張りを主と考えたものらしく、敵に対する側の土塁はそんなに高くない。むしろ、二ノ丸のほうが土塁が高く築いてあり、実戦的なすごさを感じさせるのである。納局、敵の進攻を受けにくく所に頂上ノ丸をつくり、弱い方に二ノ丸、三ノ丸をつくり、防備を強くしたものらしい。ただ、土塁というのは、実践的な長城のようなものを例外として、むやみに築かれではない。一ノ丸や二ノ丸のように、つまり四角形をした所だけのようである。従って、郭のなかでも重要人物、つまり大将が陣どっている所にしか土塁を築いてないようだ。陣所については、実践的意味と身分にもとづく規律的な面があるように考えられるのである。

(3) 主な砦跡の遺構踏査について（文中の数字は目測による概数である）

次に主な砦跡について地図の番号順に概略を述べることとする。

①の砦跡

まず、円護寺部落の中ほどから裏山に登ると、左手に住宅団地の造成地が大きく開けている。右に進路をとり尾根づたいになだらかな登り道を行く。尾根の幅は広く30mぐらいある。その尾根の右側に土塁が築かれており、一段おりたところにも一部土塁が築かれている。土塁は久松山側に面して長々と続いている。400mぐらいはありそうだ。やがて左に直角に曲る。その地点に矩形(10m×15m)の郭があり、さらに50m行った所に矩形(10m×10m)の郭がある。その下方にも郭(5m×20m)がある。この下方の郭は掲手を守るためにであろう。この郭により、尾根づたいにて続く後方の山と区分されている。後方の尾根は非常に急であり遺構はみあたらない。この円護寺砦跡をみると周囲を谷に囲まれた巨大な航空母艦といった感じを受ける。尾根は平になっており多くの兵士が居住できるとともに、四方は急な斜面で敵の進入を拒み、長い土塁は兵士の士気を高めるにふさわしい。この砦の最高部にある主郭は敵を狭い谷に追いこんで、谷むこうの②の砦とにより挟み撃ちをねらっているものと思われる。

②の砦跡

円護寺神社の裏山は、見事な照葉樹林の森をなしており、小鳥の声がたくさん聞こえてくる。しばらく行くと落葉樹の林になるが、ここかしこに巨木の切り株がみられることから以前はうっそうたる森であったことが想像される。かなりきつい斜面を登りつめると急になだらかになり頂上部に広い郭が見える。巾15m、長さ30mの整然とした郭であり、周囲に土塁を築き、久松山側の最前部に4m四方の台状の遺構がみられる。久松山と反対の側に一段低い郭があり、土塁の状態がとても良く残っており、入口部分は厳重に守られているふうである。この砦は数ある砦の中で最も鳥取城天守に近い。鳥取城の動向をさぐるには最適な場所である。視覚的な距離感といったものなのであろうか、高い所の敵を見ようと思えば近くの高い山に登るに限るという事を実感する。またこの砦についても①の砦と同じように掲手と考えられる所に第二の郭がある。これは前述のように敵が円護寺の谷沿いに本陣

山に攻め込むのを、又は敵を狭い谷に追い込むかして挟み撃ちにすることを、ねらったものと考えられる。秀吉方の包囲陣というものは、ただ単に包囲したということだけではなく、鳥取城方の一線突破ということに対して厳重な防備をしており、地形を有効に使っていたことがうかがえる。

③の砦跡

十神林道を自動車で走りつめ、尾根づたいに太閤ヶ平にむけて遊歩道を歩く。左手には円護寺からの谷が分かれて深く入りこんでおり、突出した見晴らしの良い所には一定の広さとともに土塁が残っている。しかし四方を囲んだ上段でなく久松山に相対した側に一本あるのみである。やがて谷が奥深く入りこみ遊歩道と交わる地点に出る。円護寺の谷と長田神社奥の谷の侵食によりできたなだらかな窪地のような所であり、人の行き来が容易に想像される所である。この一帯を見張るというか、守るために1つの砦が存在している。まさに十字路の角にある交番所とでもいった様子なのである。周囲を土塁でかこみ、前部に二ノ郭を設け、小高い所に陣取っている。久松山と尾根づたいに非常に近い所にあるため、最初どちらの遭構が判断がつかなかったが、付近の遭構から推察するに秀吉方のものであると考える方が妥当なようである。郭の後部にも下方に小さな半を多くもち、可成りの兵士を持っていたことが想像できる。砦の後部下方にある「ひょうたん池」「からづみ池」がどちらの勢力範囲に入っていたか全く判断に困ってしまうが、秀吉方だとする方がスッキリするようだ。

④の砦跡

櫛駄神社の谷と栗谷神社の谷の中間にある小高い峰に櫛駄公園の裏山から登る、急な斜面を木に網まりながらしばらく登ると見晴らしの良い尾根に出る。尾根は可成り広く、明らかに人の手を加えたとみられる平が陥落所にみられ、山道も一定の道幅でくの字形に続いている。栗谷に伸びる尾根と櫛駄に伸びる尾根の合流地点に④の砦がある。三段の郭からなり、段差は大きい。帶曲輪が久松山側に出ている。さらに上に登っていくと土塁をもった郭(15m×25m)がある。この2カ所の郭により、栗谷側から谷沿いに進入する敵を挟み撃つようにねらったものと考えられる。

⑤の砦跡

さらに尾根づたいに太閤ヶ平方面へ登って行くと、土塁を有する5段の郭が一直線上に並んでいる。土塁の構からみて、相当な武将のものであることがわかる。各郭を合せると50mにも及ぶ。ただし主郭の土塁が表側の櫛駄の方向に築かれているのが疑問であるが、この地点は櫛駄からの谷が深く入り込んでいる所にあり、したがって背後からの敵の攻撃に備えたものであろうかと考えられる。まことに砦というものは用意周到に築かれているものである。

⑥の砦跡

菅林砦の自然遊歩道が最近この付近にもつけられ、歩くのがとても便利になった。ただし砦は遊歩道からはずれて高い所にあるものもある。しかし見慣れてくると、下から見ても人の手がかかって水平になっている所は他と異っているものすぐ見わかることができる。⑥の砦はその様な所にある。小さな山全体に削平地がつくられており、頂上に菱形をした主郭がある。大きなものであるが土塁はない。

この他にもこの峰にはたくさん遺構があるが、それらは④⑤⑥の砦と関連した支城のような、連絡と見張りの働きをしたものであろうと考える。

⑦の砦跡

この砦跡は、非常に興味のある砦である。というのも鳥取城攻防戦で秀吉側が戦い取った砦だと推論されるからである。つまり秀吉方武将である宍戸善洋坊が鳥取本城と雁金山城との連絡を断つためにこの付近に攻め入り、激戦の末一帯を手中におさめ、丸山城を孤立化させ、鳥取城の陥落を早めたと、史書に書かれていることから、この史実を現地の砦にだぶらせて考えた結果によるものである。

円護寺斜面の円護寺側入門付近から登る。可成り急な斜面である。大きな岩石が露出しているし、頂上付近には矢竹が生えている。頂上はあまり広くはないものの久松山側に土壘を築き、雁金山方面に出口をつけ、一種異様な緊迫感がただよう。

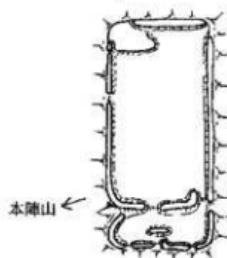
以上砦の概略を勝手きままに述べてみた。私も山城を歩いているうち、山城の面白さにとりつかれたようだ。というのも一種、子供の頃の戦争ごっこ的な興味もあり、また現代の私達が忘れている空間把握の仕方、つまり体で測り、目で測るといった距離感覚の新しい体験があり、雑木林の中にひっそりたたずみ、自然と全く同化しているかにみえる遺構に新鮮さを感じるからなのであろうか。

ただ気をつけなくてはいけないのは、踏査にあたっての私有地への配慮が必要なということであろう。その点自然休養林内は自然への暖かい配慮を怠いやれば自由に散策できるのではなかろうかと思う。最後に、私は歴史というのは戦さの歴史だということと、新しい政治秩序の前には必ず戦さがともなうものだということを遺構踏査をつうじてひしひしと感じた。ただ戦さのどちら側が正しいかということは後世になってはじめて明らかになることだと思う。願わくば先人の靈の安からんことを。

些 跡 遺 構 見 取 図

②の些跡

久松山(鳥取城)

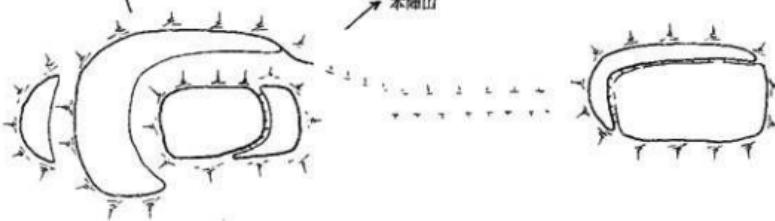


本陣山

④の些跡

久松山(鳥取城)

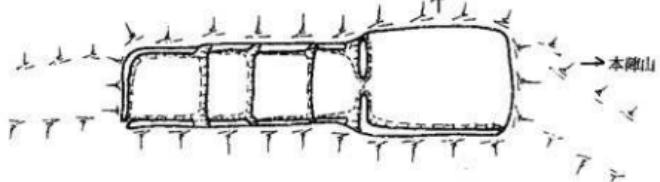
本陣山



⑤の些跡

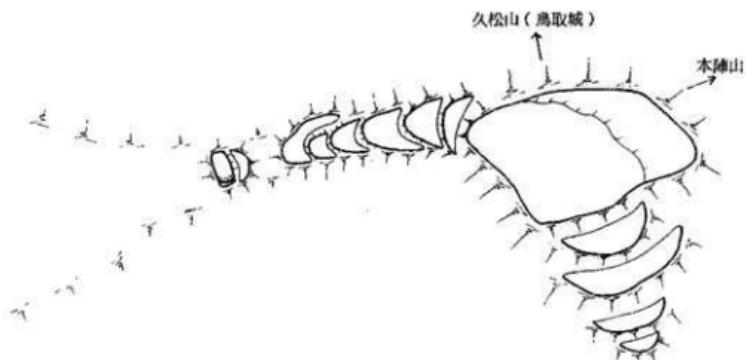
久松山(鳥取城)

→本陣山

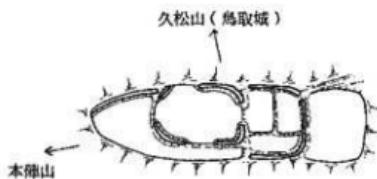


0 10 20 30m

⑥の苔跡



⑦の苔跡



0 10 20 30 m



第8図 羽柴秀吉方營の遺構分布図

鳥取市文化財報告書17
ヒル山岩跡(第二次)発掘調査報告書

昭和59年3月31日印刷

昭和59年3月31日発行

編集・発行 烏取市教育委員会
烏取市遺跡調査団
鳥取市西郷町116番地
電話 22-8111番

印刷 総合印刷出版株式会社